

灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年

知念 勇⁽¹⁾・池田栄史⁽²⁾・江藤和幸⁽³⁾

(⁽¹⁾沖縄県立博物館、⁽²⁾沖縄大学非常勤講師、⁽³⁾琉球大学史学科)

Tentative Chronology of Okinawan Kiln (Wakuta, Tuboya, and Kogachi)
According to Style of Ash Glaze Bowl

Isamu CHINEN⁽¹⁾, Yoshifumi IKEDA⁽²⁾, and Kazuyuki ETOH⁽³⁾

(1) Okinawa Prefectural Museum (2) Division of General Education of Okinawa University (3) Historical Division of the College of Law and Letters University of the Ryukyus

一、はじめに

近年、沖縄における近世の古窯とその製品に関しては、考古学の分野からも強い関心がもたれるようになってきた。その原因のひとつに、最近までほとんど手のつけられなかつた近世の集落跡やそれに伴う墓地などが、埋蔵文化財の対象とされ活発に発掘調査が行われていることが上げられる⁽¹⁾。

これら近世の遺跡からは、九州や中国産の陶磁器と沖縄産の陶器などが多数出土する。グスクなどから出土する陶磁器の、80~90%が中国産の輸入陶磁器で占められる⁽²⁾のに対し、近世の遺跡から出土する陶磁器は中国の輸入陶磁器にとってかわって、沖縄産の陶器で占められるようになる。

しかしながら、このように大量に出土する沖縄産の陶器に関しては、編年的位置づけが明確ではないために、概括的な報告にとどまっているのが現状である。窯の創設などに関する資料に乏しく曖昧な点が多い。

しかしながら最近、先述したように考古学の分野から沖縄の近世陶磁の偏年に關心が集まり編年についてもとりくまれつつある⁽³⁾。本稿では湧田窯跡・古我知窯跡・壺屋窯跡などから採集された当館所蔵の灰釉碗などを中心にして、窯詰技法や器型変化などの特徴により、これらの窯の成立年代などについて考えてみたい。なお今回紹介する資料はすべて

窯跡周辺からの表面採集資料であり、発掘調査によって得られた資料ではないことをあらかじめことわっておきたい。

二、 窯跡の概要とその採集資料

1) 古我知窯の概要

本窯は名護市古我知奥又原山中の中腹にある。昭和16年頃山里永吉氏によってはじめて調査された⁽⁴⁾。この地域は現在砂糖きびとパイン畑となっており、多数の陶器片と窯道具などの破片が採集されている。しかしながらこの窯に関する文献等の史料は皆無であるため、創設については不明である。

古我知窯跡が確認され窯跡から多数の製品が採集されたことによって、各地の古墓からこの窯の製品とみられる厨子甕などが発見され資料が増加した。

古我知窯跡や古墓から採集された製品には、水甕類、壺類、厨子甕、香炉、花生、徳利、摺鉢、皿、灰釉碗、鉢、獅子置物、火取り、急須、アンビン、火鉢、網のおもり、桶、茶碗、瓶子、サークーなどのあることが確認されており、壺屋などとほとんど変わらないほど多種のものが焼かれていたことがわかる⁽⁵⁾。

2) 古我知窯跡の採集遺物

当館には昭和51年から同56年の間に採集された約5百点余の古我知窯製品の破片がある。それらの中から、今回は特に灰釉の碗を中心に紹介し検討することにした。

第Ⅰ図は古我知窯跡からの採集資料である。同図1から6までが碗である。2の黒釉を除くとすべて灰釉の碗である。同図1は胴部がわずかに膨らみをもち、胴部の下部から底部にかけてはヘラ削りで、その上部から口縁部は水引成形である。この点は1から6までのすべてに共通である。外底部の中央部がへそ状に取り残され、もりあがった状態で残されている。高台の畳付の幅は3~5耗ほどで、多少外側へ開きぎみに削られている。同図3だけが高台畠付の部分が尖っている。

施釉はフィガーキイとよばれる方法によりなされているため、胴部下部から下は露胎となる。口径に対する底部と器高の比率は、前者が0.48で後者が0.45である。後述の湧田窯に比べて腰が低い。

同図6の内底には、重ね焼き時の高台部分の付つきが見られる。これらの碗には砂目積めの痕跡も認められるが、後述する湧田焼き程顕著ではない。

同図7と8は無釉のフタである。上のつまみや全体の形状は須恵器を思わせるものがあ

る。同図10～13は香炉器形のもので、褐釉または黒釉がほどこされている。13は三足の鍋形をしているが、口縁部が鰐縁状に外反している。そのため蓋付きの小型鍋とみられるサーク（薬を煎じる鍋）ではないかと考える。これの内面には灰釉が施されている。

同図16は盤状のもので、14・15・17は皿である。同図19と20は擂鉢で、20は高台を有する。21と23は香炉状のもので22は黒釉の急須である。

古我知焼の上釉には、黒褐色を基調としたものが多いたい。とくに甕・壺・鉢・高炉・厨子甕は黒釉であるが碗は大半が灰釉である。この他クワデーサ色と称する黄緑色の甕や白釉もごく一部ではあるがみられる。しかしながら、湧田窯や窯屋などで見られる染め付けは未発見である。

古我知の灰釉碗の胎土は精製された白土が使用されている。そのため、焼成温度が高く、磁器質に近い焼きとなっている。

3) 湧田窯（壺川窯）の概要

那覇市泉崎の県庁所在地を中心に、壺川を含めたかなり広い地域にまたがって分布している。県庁所在地を中心に瓦窯があり、その東南側と壺川付近を中心に上焼窯が在ったと考えられる。

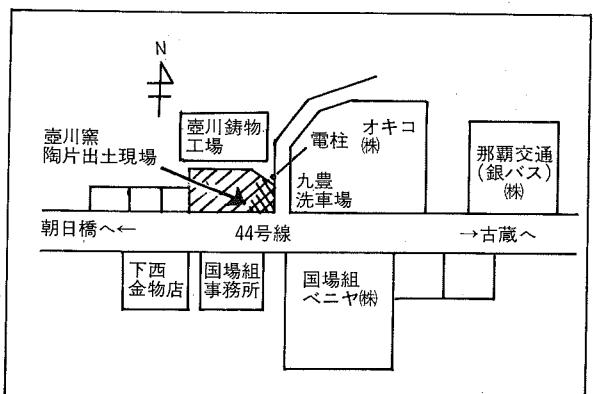
『球陽』附巻には元和3年(1617)「尚豊王は王命により薩摩から朝鮮(高麗)人陶工である、一六(張獻功)・一官・三官を連れて帰り、湧田村で陶法を教えさせた。」と記されている。家譜によると⁶、

三人の朝鮮陶工たちは王府からそれぞれ住宅があてがわれ、陶業の指導をした。一六は帰化して仲地麗伸と名乗り沖縄の女性と結婚し、子孫代々陶業を受け継いだ。

その後、平田典通や仲村渠致元らの名陶工もここで作陶しており活躍した場である。湧田窯は壺屋に統合されるまでは沖縄における最大の窯場であった。

昭和61年から、沖縄県の新庁舎建設に伴って瓦窯の中心地と見られる地域の発掘調査が行われた。その結果、数基の半地下式の平窯(瓦窯)が発見され注目された。これらは南中国辺りに起源を持つとみられる。

本稿で紹介する湧田窯の資料は、やちむん会々員であった平良専明氏によって、昭和45年6月に発見された。この場所は那覇市壺川240番地の上原信一氏の所有地で、アパート建設中の工事現場から発見されたものである。これらの採集遺物については、宮城篤正氏



第1図 壺川窯附近見取図(発見当時)

によってその概略が報告されている⁽⁷⁾。

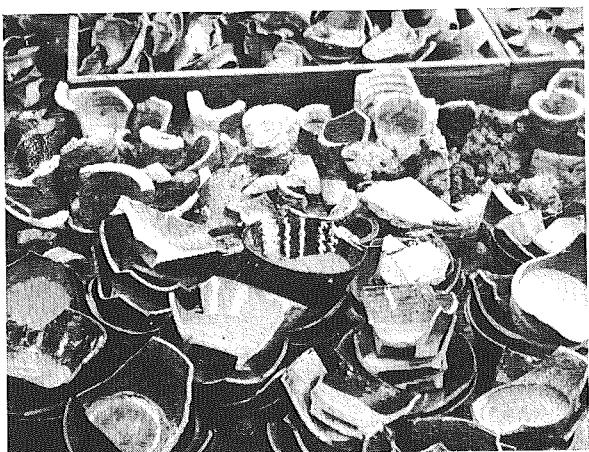
これらの遺物は、建設中のアパートのコンクリート柱穴を掘る作業現場で発見された。工事との関係で発掘調査は不可能だったので、表面採集にとどまった。

この窯について宮城氏は、「壺川窯としてとらえ、壺川窯は1743年用啓基仲村渠致元によって築かれた窯であり、それがおよそ明治の中頃まで焼かれていたといわれる。発見された壺川窯が致元の開窯になるかどうか、或いはその他の窯であるかも知ないので、その点確かなことは言えない。いずれにしても壺川窯の流れを汲む窯であることは間違いないからう。」としている。

仲村渠致元は、唐名を用啓基といい那覇市泉崎に生まれた。1743年王命によって八重山に渡り陶法を伝え、1730年には陶技研修のため薩摩へ派遣された。

鎌倉芳太郎氏は、致元と薩摩との関係について次のように述べている⁽⁸⁾。「致元の遺作に、白磁釉、青磁釉、瑠璃釉のものがあるが、これ等は金和の肥前伝の再来のように思われる」。また仲村渠家の家譜によると、「雍正九年（1731年）、陶業を薩州の法によって築き立てた。これは、従来の窯では焼きあがって窯出しどする時に陶器がよく破損する。そこで窯の中に階段を設け、試陶の結果破損がないので、諸窯もこれに学ぶようになった。」「乾隆八年、真和志間切古波蔵村百姓地山野の内あて川原（千七十八坪四分八厘）に新窯を築き、従来の壺屋の窯（嘉数築登之親雲上共有）より引越す。同十年、座敷叙せらる。同十六年、尚穆王践祚に当り、賀儀の事のために、憲令を奉じて御土器を焼きだし献納する。」とある。このようなことにより、仲村渠致元によって、乾隆八年那覇市古波蔵の山野の内川原に新窯を築いたことが知られる。これが壺川窯ではないかと考えられる。

4) 湧田窯跡（壺川窯）の採集遺物



第2図 湧田窯（壺川）採集遺物

この窯からの採集品には、碗、皿、茶碗、カラカラ、花活、火取、ワンブー、急須、対瓶、などの製品と、トチ、カラマー、サヤなどの窯道具がある⁽⁹⁾。

第II図の24から44までは、湧田窯跡採集の灰釉碗である。器型の上から大きく2タイプに分けることができる。そのひとつであるタイプAは、28に代表されるもので高台部から口縁部にかけて直線状に立ち上がる碗である。同

図24から34・36・43がこのタイプに属する。もうひとつのタイプBは、第Ⅱ図35・38・42・44にみられるもので胴部の下半部がわずかに膨らみをもち、口縁部がわずかではあるが外反するタイプである。

これらのA・Bタイプとともに、胴部の下半部から高台にかけてはヘラ削りであるのに対し、その上から口縁部にかけては水引成形となっている。

上釉はすべてフィガーキイによって施された灰釉で、ダークグリーンを呈していて不透明である。高台置付けの幅は4～5ミリと古我知に比較して多少幅がある。同図44は、あまい焼きのもので、焼成温度が低く胎土が白いために上釉の灰釉が白釉のように白くなっている。

これらの灰釉碗の口径に対する高さと底部の比率の平均値は、タイプAが0.54でタイプBが0.50となっており、古我知窯や窯屋窯のものに比べると大きい。つまり、底部から口縁部への立ち上がりが急なものである。43は古我知のものに近く、44は窯屋へつながると思われる。

第Ⅲ図は白釉、黒釉、染付（清釉）などのもので、45～47は内湾形の小型碗である内外面ともに白釉が施され、45と47は口紅状に口唇部に褐釉が施されている。内底面は、すべて蛇の目釉かきとりとなっている。48～52は胴部が張る外反タイプの碗で、48と50が白釉の他はすべて黒釉である。64は胴部に灰釉碗が付着した黒釉の急須である。62、63、65は外面は黒釉で内面は灰釉が施され、コバルト釉の丸玉文を円形に配した花文が見られる。66は内外ともに白釉が施されその上に花文の染め付けがなされる大振りの碗である。

以上の採集遺物からみると、この壺川から採集された資料のうち、第Ⅱ図の灰釉碗と第Ⅲ図の白釉及び黒釉や染め付けなどの製品の間には時間差のあることが考えられる。その理由のひとつは、窯詰めの技法が灰釉碗では砂目詰めであるのに対し45以後は蛇の目釉剥ぎになっている。ふたつめは、碗の器型が底部から口部へ直線的に立ち上がるものから、第Ⅱ図44のような外反タイプ、49や52のように胴部が張り外反するタイプへと変化していく、器型の変化を捕らえることができる。

湧田窯（壺川）から採集された遺物は、その出土状況が明確ではない。しかし前述したように、採集遺物からみると時期差が認められる。そのためこの地は灰原などの窯跡ではなく、他の場所から持ってきて捨てた場所である可能性もある。

5) 壺屋窯の概要

那覇市牧志の南一帯を壺屋と称している。この地に窯屋窯が開窯されたことについては、『球陽』（卷之七）に次のように記録されている。尚貞王14年、康熙21年（1682）「移三設陶業二干牧志邑地」の状に、昔有二窯屋一、在二美里群知花邑、首里宝口、那覇湧田等地、

共計三箇所一、至二千是年一、其三地陶窯移二在牧志邑南一、以為二一所一也（昔窯屋は美里の知花と首里の宝口、那覇の湧田の三か所にあり、その陶窯を牧志村の南に移して合併させた）。

窯屋の統合は、『平等所裁判記録』のなかの「花城親雲上御褒美願い」の記録によると、『球陽』の記録より1年おくれてあったことが知られている¹⁰。以来、窯屋は琉球陶器的一大生産地となり、あらゆる種類の陶器が生産されるようになった。

戦後もいち早く窯屋は復興し、活発に陶器の生産がなされた。1960年代からは急激にこの地域の市街化が進み、上り窯の煙による公害問題が持ち上がってくる。1970年代になると公害問題で、上り窯が使えなくなり、窯屋ではガス窯に変わって行く。そして1972年には、窯屋を代表する陶工金城次郎氏が読谷村座喜味へ窯を移し、窯屋の新しい時代が開始される。

6) 窯屋窯跡の採集遺物

第V図が壺屋窯跡から採集された遺物である。同図77・78・79は湧田窯の系統を引く灰釉の碗である。いずれも砂目積めの跡がみられるが湧田窯のものほど明瞭ではない。77、78は底部から口縁部にかけて直線的に延び、胴部から口縁部は水引で、底部はヘラ削り成形である。このような成形や胎土などは、湧田窯にも共通する特徴である。しかし口径に対する器高と口径に対する底径の比率がいずれも0.48である。これに対し、湧田窯は0.50（底）と0.54（高）であるので、湧田窯の方が腰高である。77と78の灰釉碗は、腰が低い点などは古我知窯のものに近い。

最近聞き取り調査した結果によると、窯屋から湧田窯系の灰釉碗が採集される範囲は、県指定の荒焼き窯（南の窯）（フェーヌカマ）の付近と、その北側のあるカマヌニーガマと称するところである。陶業組合の小橋川秀義氏やシーサー（獅子）作りの陶工石川喜進氏からの聞き取りでも、この一帯が窯屋に統合された直後の窯場であったと言われ、当時は多くの陶工たちが湧田に居住していて、窯屋まで通って仕事をしていたといわれる。

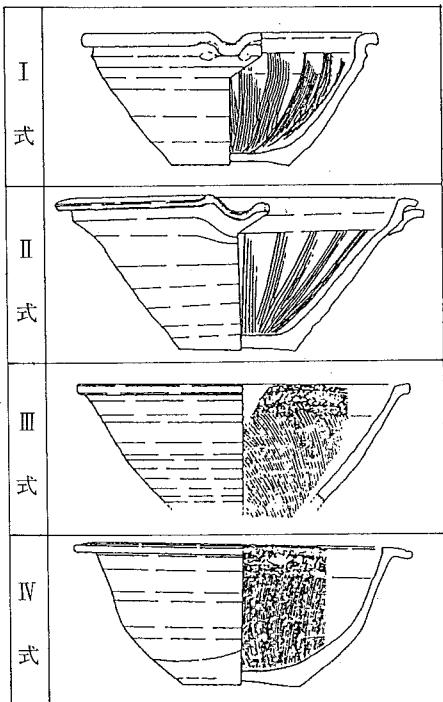
第V図79の灰釉碗は口縁部が欠失している。底部から胴部へ移行する部分が多少円くなっている。これも古我知の第I図6と類似する点である。第V図81、82は胴部が円くなり、口縁部が外反するタイプの染め付けの碗である。高台が高く、内底部には蛇の目釉剥ぎがみられる。85の黒釉の碗は口縁部が直交であるが高台が高くなっている。83は内湾する小型の碗で、内面が灰釉で外側は黒釉である。同図87と90も同様の施釉方法をとっている。92はランプであるが、上部の方が焼くときに歪曲している。

文献よりみた沖縄における窯業の開始は、1713年に編集された『琉球国由来記』にみることができる。これによると、唐人渡嘉敷三良（？～1604年）が始めたと言われる真玉橋

の瓦窯がそうである。

第V図86～89は白土が使用された上質の杯である。86は鉄釉の上に上掛けが行われている。87と89では面取りがほどこされている。91は鉢形をした擂鉢で安里氏等による⁽¹⁵⁾擂鉢の編年では第IV期になる。

第V図93、94、95はトチンまたはトチである。陶器の胎土と同じ土を使つたいわゆる同ドチである。81から95までは最近まで造られて使われたとみられる製品である。77～79までの製品と81以降の製品には、時間差を感じられるので、その間を埋める作業が今後必要である。



第3図 擂鉢の編年（安里他原図）

三、考 察

以上、各古窯からの採集遺物について述べてきたが、これらの採集遺物の特徴を整理することにしたい。

まず古我知窯についてまとめてみると、以下のようになる。

①第I図1～6の灰釉碗は、底部から口縁部への立ち上がりが直線的ではない。口縁径に対して器高が低い、つまり湧田窯のものに比べると外傾するなどの特徴から、湧田窯の灰釉碗Bタイプに属する。②重ね焼きのときの砂目積め跡がみられるが、湧田窯ほど明確ではない。③古我知窯には、蛇の目釉剥ぎもある。④胎土は白色土が使われており、灰白色になる。上釉は湧田窯が不透明であるのに対して古我知窯は光沢があり、透明である。⑤前述したように多くの器種がある。⑥上釉は黒褐色釉を主とするが灰釉もあり、わずかではあるが白釉がある。染め付けの製品は未発見である。

湧田窯の特徴は、①灰釉碗のタイプAは底部から胴部への立ち上がりが急である。②灰釉碗は重ね焼きの時の砂目積めの跡が明瞭に残っている。③第II図と第III図では時期差があると考えられる。④第III図は、黒釉、コバルト釉または染め付け、白釉などが見られる。同図45、47は白釉の小碗の口唇部に黒釉が施され、いわゆる口紅状の釉がけがなされている。⑤第III図の碗は蛇の目釉剥ぎである。⑥第III図53と66は染め付けである。

壺屋窯については、①第V図77、78の湧田窯から引き継がれた灰釉碗とみられるものである。砂目積めが認められるが湧田窯ほど明瞭ではない。②口径に対する器高が低く器形上は古我知窯の碗にものに近い。これらの碗は成形や上釉などは、湧田窯の製品に酷似する。③同図77、78と81～85までの碗では器型に大幅な変化がみられることから、両者にはかなりの時間差が認められる。④同図82、85、91は高台が高いわゆる広東碗に近い。⑤同図の82～87までは、最近那霸市の教育委員会から依頼されて調査した。壺屋の南（フェー）の窯（上焼き窯）から採集した遺物と同一のものである。これらの物は本土復帰直前まで焼かれていたといわれる、などの特徴がある。

これらの遺物からみた特徴に加えて特に沖縄の古窯の編年となりたちを考えるために、最近発掘調査が活発になってきた九州の古窯とその成果がきわめて重要であると考える。なかでも多くの成果を上げている佐賀県（有田・伊万里）における調査をもとにまとめられた、大橋康次氏のいくつかの論文がある⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾。それらの中から、沖縄の古窯ともかかわるとみられる、窯の形態や窯詰方法などの事項をいくつか年代順に拾い出してみると以下のとおりである。

①、唐津焼が慶長4年（1604）銘の木簡と共に伴した。（平安京）

②、唐津焼が天正13年（1585）銘の木簡と共に伴した。（堺環濠都市遺跡）

③、砂目積は、慶長3年（1598）の秀吉が朝鮮出兵の時に連れ帰った陶工によってこの窯積技法が九州へ伝わったと考える。

④、胎土目積から砂目積に変わるのは、1598年頃とみられる。この頃から磁器が焼かれるようになった。（原明窯ではこの頃白磁碗が焼かれた）

⑤、17世紀の初期には、皿の見込みに円凹の削り込みを施した磁器がみられる。これは李朝磁器にみられる特徴であるので、朝鮮人陶工たちによって作られたと考えられる。

⑥、寛永14年（1637）、鍋島藩は有田・伊万里地方の窯場の整理統合をなし、日本人陶工を追放し13の窯場に統合した。これ以後、有田周辺で砂目積の灰釉陶器の皿は焼成されていない。

⑦、15、16世紀に多く輸入された、中国・明時代の青磁や白磁・青花は目積方手法をとっていない。ところが李朝陶磁の窯詰技法には目積がある。胎土目積は14世紀の高麗後期からみられる。中国広州周辺の窯では、15～16世紀の皿類は胎土目と細かい砂積によるが、16世紀の亭支里窯や16世紀後半から17世紀前葉の炭窯里窯、詳林里窯などにおいて砂目があり、その後は砂目積となる。砂目積めのものとしては、1609年銘の白磁舍合子が出土している。このように16世紀から17世紀頃にこの砂目技法が盛行した。

⑧、砂目積の溝縁皿の下限年代を消費地の資料でみると、1618年新潟県長岡城蔵王堂城跡の資料からの壕あとから出土する。

⑨、1630年代までは皿の口径に対する底径の割合が2,7分の1程度と小さいが1640～50年代には2分の1から8分の1と比較的大きい。

⑩1680年頃に皿・鉢類の高台内を蛇の目状に釉ハギする技法が始まる。

⑪、コンニヤク伴（印刷法）や型紙摺は、18世紀前半を中心に流行した装飾法である。長崎県長与町の長与窯の物原では、下層からコンニヤク伴が主で上層からは広東碗が主に出土している（高高台碗ともいう）。

⑫、広東碗（高高台）は天明ごろ（1781～88）から現れると推測される。

⑬、18世紀後半には、高台内中央を円く削り込み、その周囲の釉を蛇ノ目状に剥いだ作り（蛇の目形凹高台）の深皿・鉢類が現れる。

まとめ

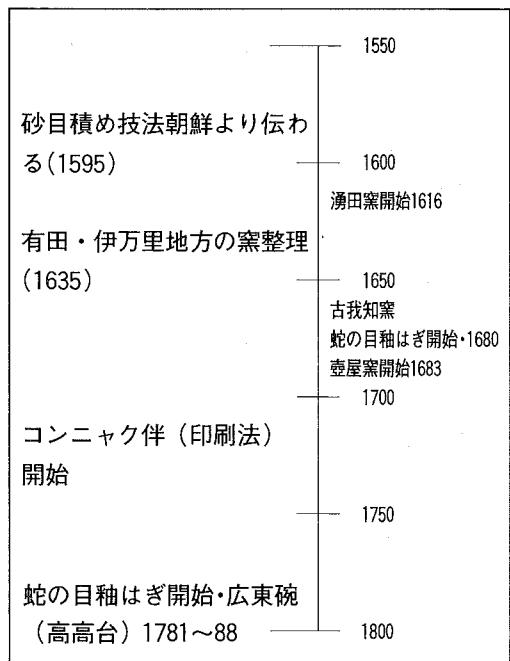
以上述べてきた各古窯採集遺物の特徴と、前述した九州における窯積め技法などとの関係で次のように考えることができる。

1) 沖縄の陶業に関する最初の記録としては、尚寧王代に佐敷王子朝昌（のちの尚豊）が1617年に薩摩・津島氏に懇願して、一六・一官・三官の三人の朝鮮人陶工を連れ帰り、那覇の湧田村に住まわせて民に陶技を伝授させたことが『球陽』に記録されている。この記録によって、沖縄における陶窯の起源1617年に、朝鮮の陶工技術が薩摩経由で沖縄に入ったことが知られる。

2) これらの記録から、1609年以後の薩摩の琉球国支配と係わって、九州の有田や唐津あたりの窯業関係の諸技術が、薩摩経由で沖縄に導入されたことは十分に考えられることである。

3) 湧田窯の開窯は、九州に砂目積めの技法が朝鮮から伝わった1598年以後のことと考えられる。

4) 今回紹介した湧田窯（壺川窯）は、筆者らがこれまでに確認した湧田窯及び他の沖縄



第4図 沖縄の古窯編年表

の古窯の製品の中にみられるトチン方による窯積めの技法は確認されていない。このことは、前述の記録にある湧田窯の開始が1617年であることとも一致する。したがって沖縄陶器の開始は、砂目積め技法が九州から伝わって以後のことであると考えられる。

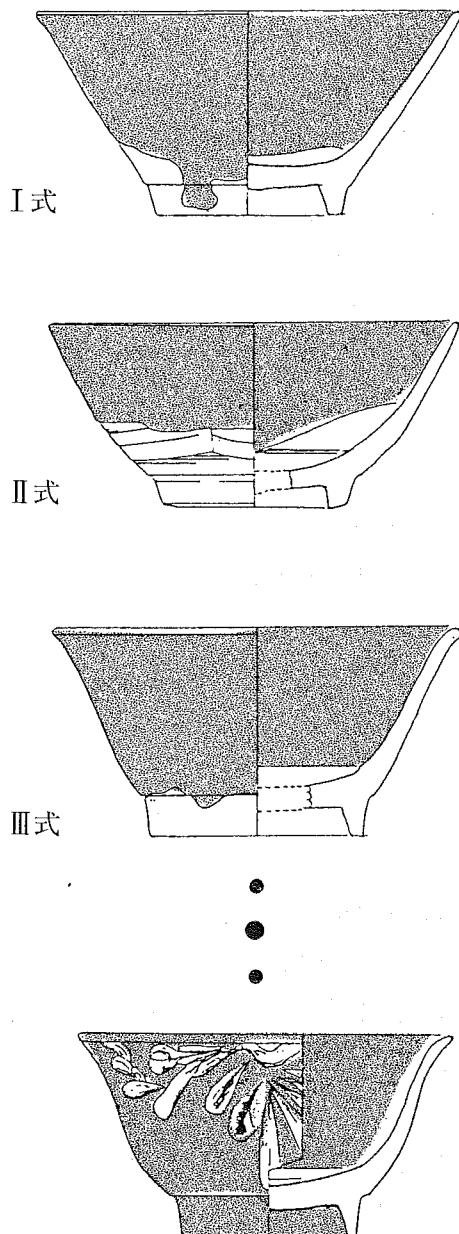
5) 今回紹介した灰釉碗の器型でみると、第5図のような編年が考えられる。このような器型からみると、湧田焼のI式が最も古く、古我知焼はそれ以後と考えられる。

古我地焼の編年については、宮城篤正氏も次のように考えている⁽¹⁴⁾。「古我地焼は、まず平田典通に始まりその弟子達に引き継がれたとの見方と、朝鮮の陶工一六、安一官、安三官の試験窯に始まるものとの見方が、もっとも可能性が高いと言えよう。いずれにしても、古我地窯は那覇の湧田窯よりは古くないように思われる」。これは、我々が今回窯跡採集の灰釉碗の器型や窯詰め技法などからだした結論と一致する。

今回紹介した灰釉碗からみると、古我知焼灰釉碗の編年的位置づけは壺屋統合の直前ごろと考えられる。前述したように、古我知焼には蛇の目釉剥ぎの碗がみられるので、少なくとも1781年までは製品が造られてことが考えられる。

6) 湧田窯の灰釉碗II式の時期には、湧田窯も壺屋窯も並行してあったことが考えられる。現在の壺屋での聞き取りでも、初期壺屋の陶工達は湧田に居住していて、そこから通っていたことが知られる。

7) 県指定の壺屋窯である南窯（フェーヌカマ）の北側に、カマニーガマと呼ばれている古い窯跡があり、ここからは湧田窯系の灰釉碗が大量に出土する。これらの碗は、第V図の70～73に紹介した灰釉碗と同類の砂目積め技法の碗である。したがって、カマ



第5図 灰釉碗の編年

ニーガマの語源は「窯の根」の意とも考えられ、壺屋統合時の窯である可能性が大きい。この窯跡は民家の屋敷内に残っており、ここを発掘調査すれば壺屋窯と湧田窯の関係がより明らかにされるとみられる。

8) 九州では、皿・鉢類の高台内を蛇の目釉はぎにする技法は、1680年ごろ開始される。これと相前後して、壺屋と古我知においてこの技法がみられることはこれらの陶業の技法が九州から沖縄へ伝えられるのが早かったことを証明している。

9) いわゆる広東高台といわれる高台は1871年以後であるが、この碗は壺屋中期頃にあらわれるとみてよい。これらのことについては、今後も課題として追求していきたい。最後に今回紹介した沖縄の各古窯から採集された当館所蔵の製品をもとに編年を考えてみたが、これらの製品はそれぞれの窯の地点での採集品である。したがって地点をちがえれば、まだ古い資料の発見される可能性があると考える。特に古我知窯についてはその可能性がある。

この小論をまとめるまでは、古我知焼の灰釉碗を湧田焼よりも古いと考えていたが⁽¹⁶⁾、今回紹介したように窯積め技法や器形からみて、古我知焼が湧田窯よりも新しいと編年する結果となった。しかしながら今回の私たちの結論は、あくまでも当館に所蔵されている採集品の範囲内にとどめておきたい。

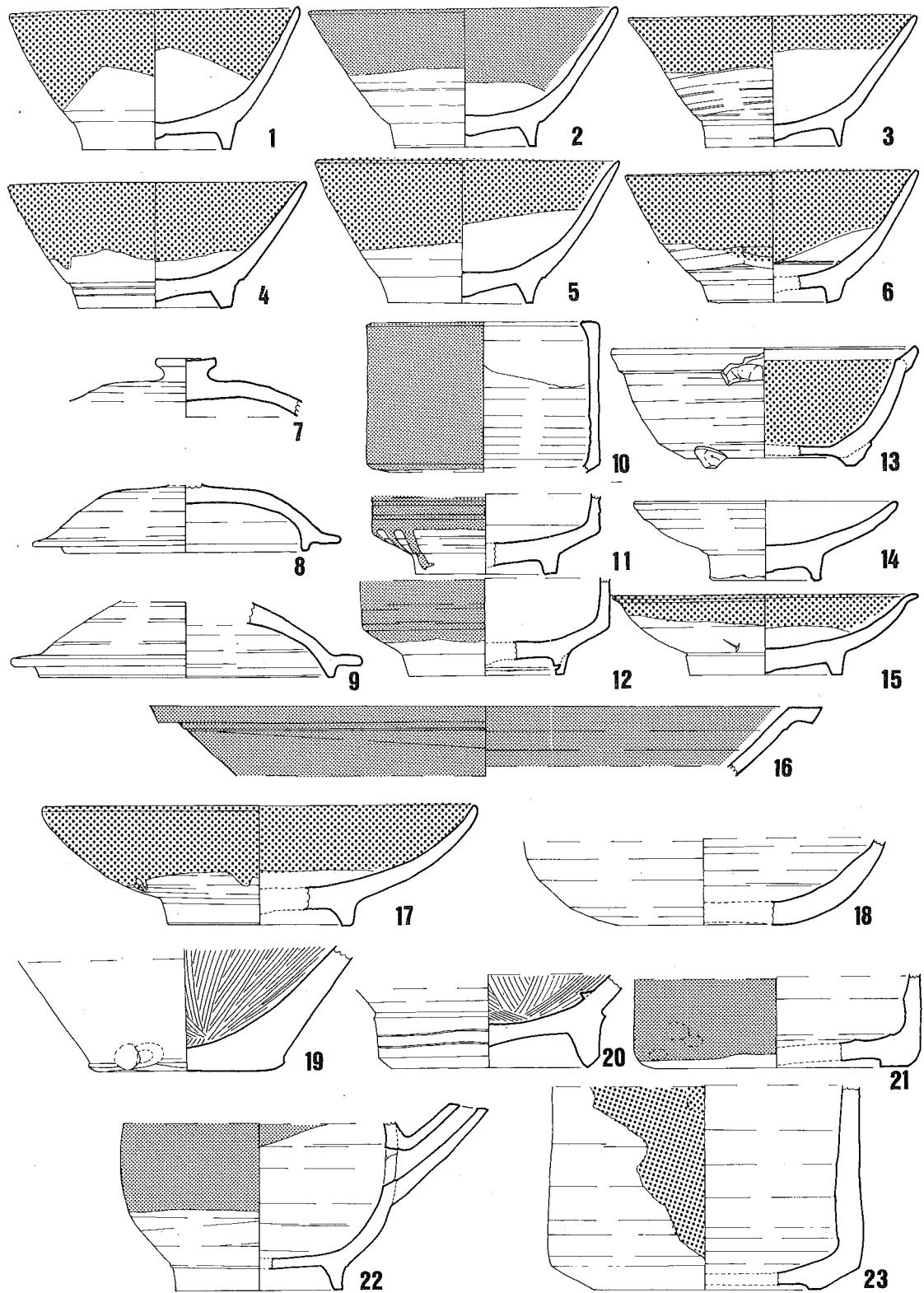
この小論をまとめるにあたって、多和田真淳、大嶺實清の両氏から多くのご教示をいただいた、厚く御礼を申しあげます。

参考または引用文献

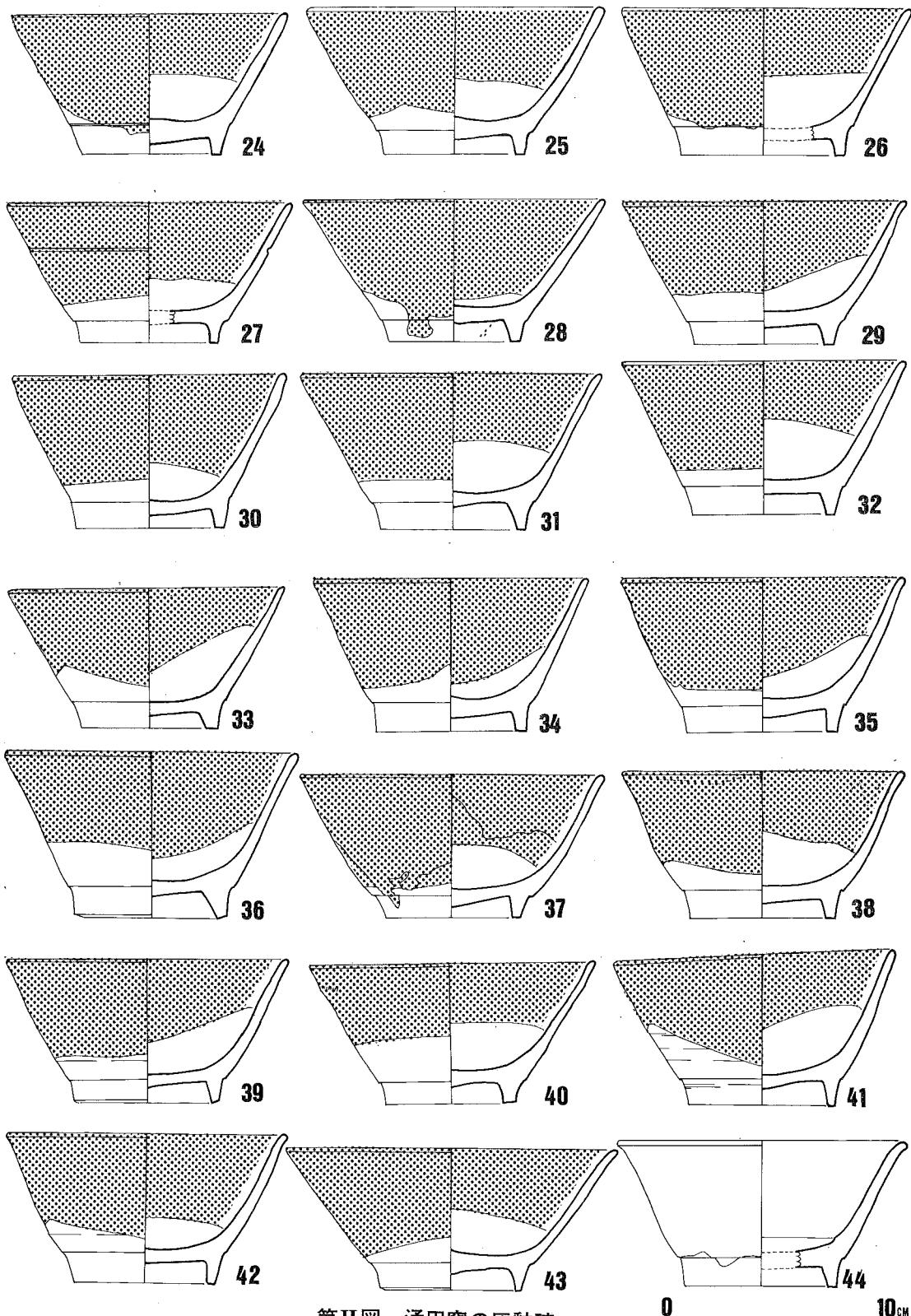
- 1) 「上・下勢頭区古墓群」北谷町文化財調査報告書第3集 北谷町教育委員会 1986年3月
- 2) 知念勇「沖縄出土の中国陶磁について」『第1回中琉歴史関係国際学術会議論文集』中琉文化経済協会主編 1987年10月
- 3) 安里進・上原政昌・家田淳一「擂鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『名護博物館紀要3号』名護博物館 1987年3月
- 4) 山里永吉「琉球の陶業史」『琉球の陶器』民芸業書第4号 昭和17年9月
- 5) 宮城篤正「古我知窯の全容を探る」『琉球の古陶1 古我知焼』琉球文化社 1972年10月
- 6) 比嘉朝健「琉球歴代陶工家譜上」『美術研究 第49号』昭和11年1月
- 7) 宮城篤正「壺川窯出土陶片調査略述」『琉球政府立博物館館報』琉球政府立博物館

1972年3月

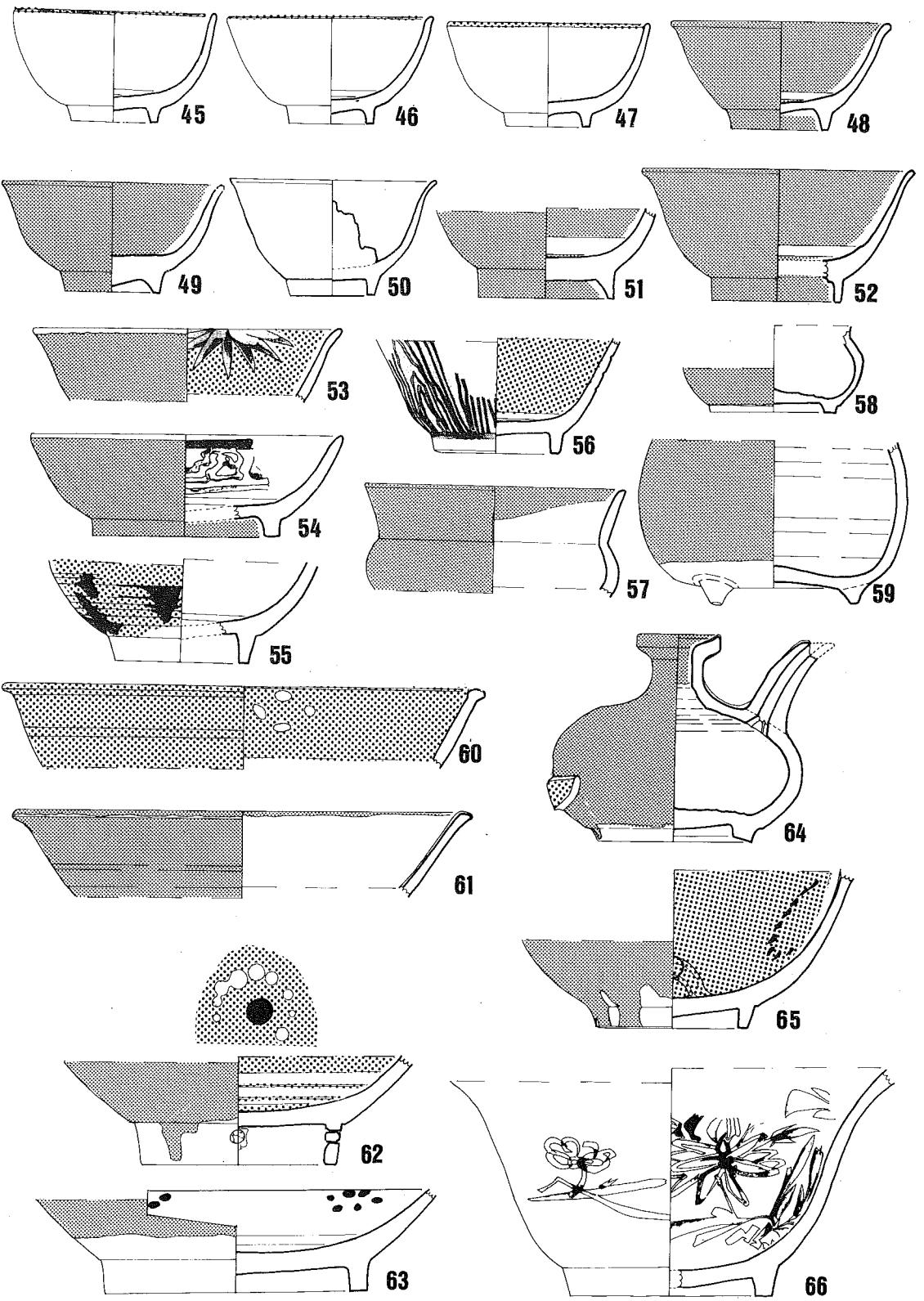
- 8) 鎌倉芳太郎『琉球文化の遺宝』(株) 岩波書店 1982年10月
- 9) 7)に同じ
- 10) 3)に同じ
- 11) 大橋康二「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について」『佐久間茂男教授退官記念 中国史・陶磁史論集』1983年3月
- 12) 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1984年10月
- 13) 大橋康二「肥前古窯の変遷—焼成室規模よりみた—」『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第一号』佐賀県立九州陶磁文化館 1986年3月
- 14) 宮城篤正「古我知窯の全容を探る」『琉球の古陶 1 古我知焼』大城精徳・宮城篤正編著 1872年10月 琉球文化社
- 15) 3)に同じ
- 16) 星 雅彦「北部の古窯巡りから」『やちむん第10号』 やちむん会 1988年



第 I 図 古我知窯の製品

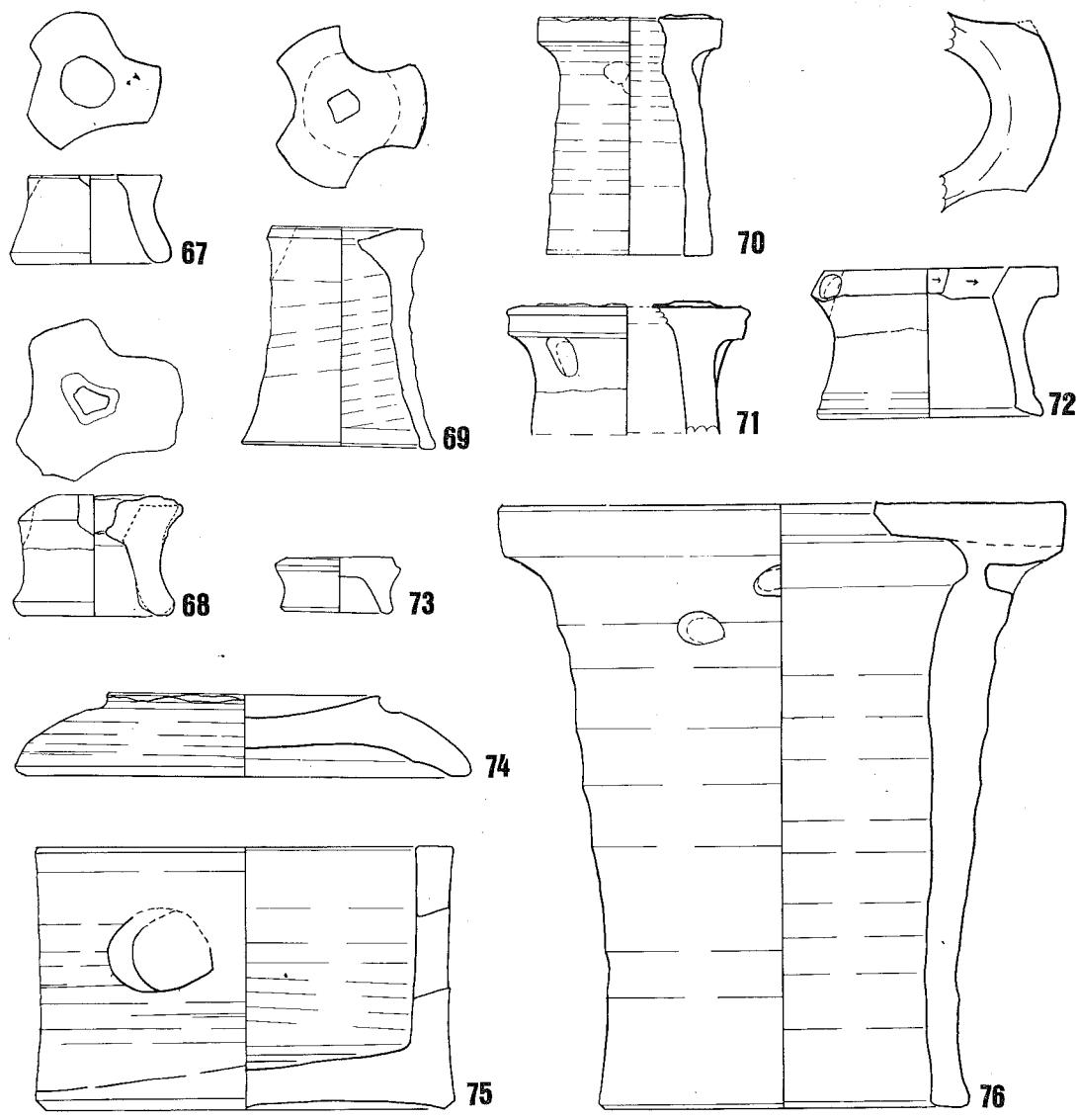


第二図 湧田窯の灰釉碗

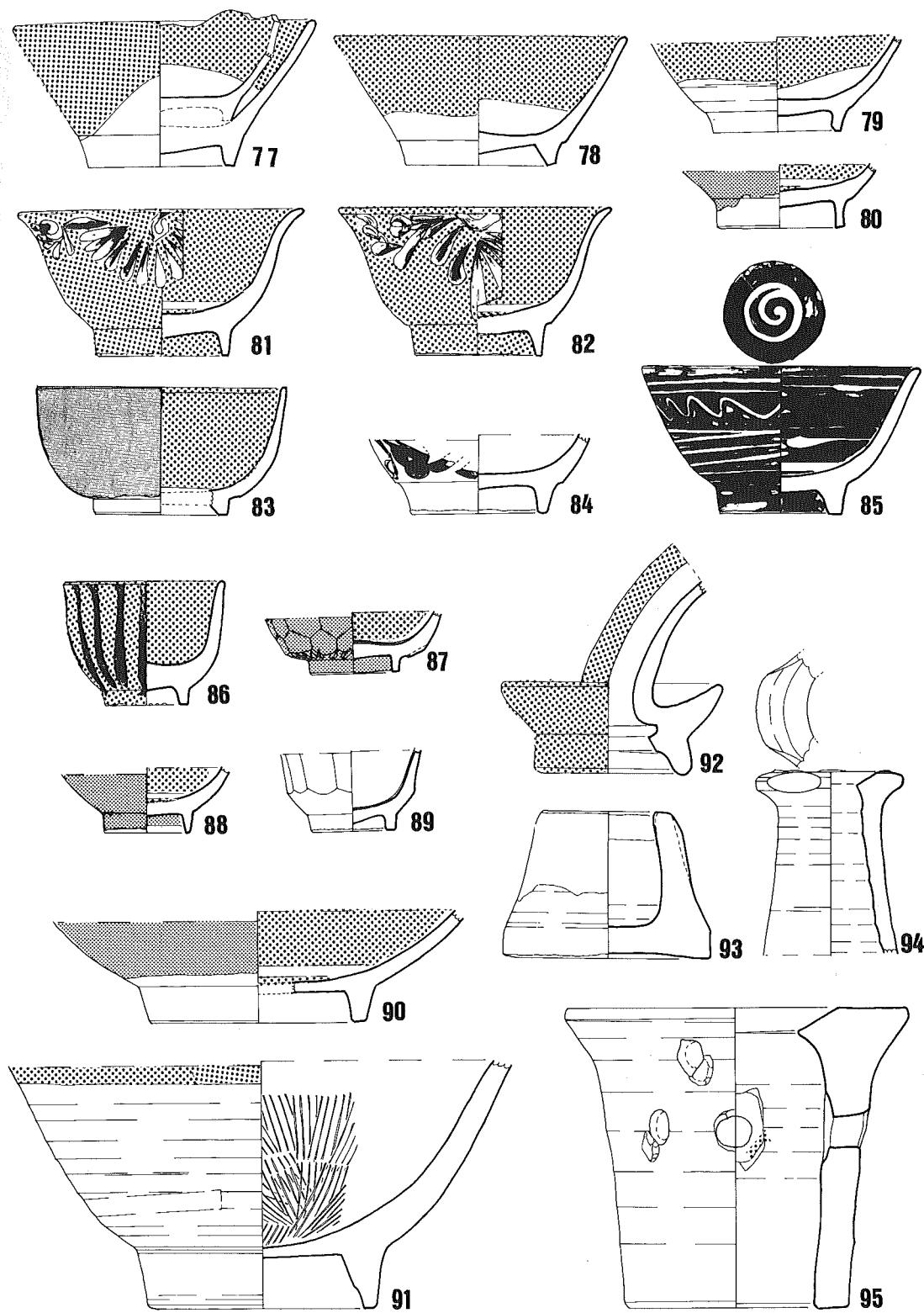


第III図 湧田窯の製品

0 10 CM

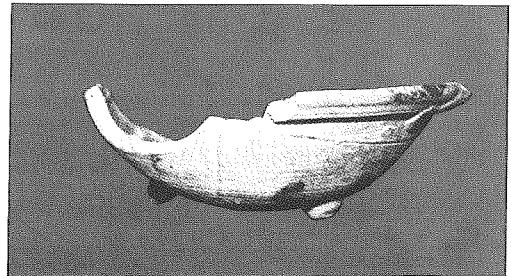
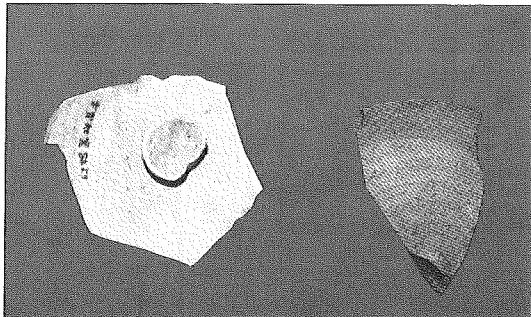
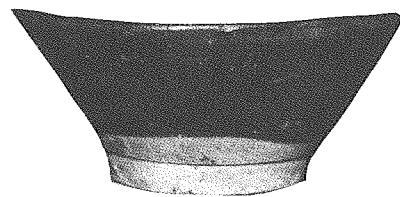
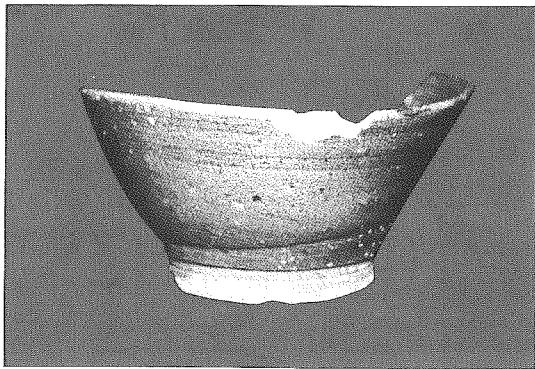
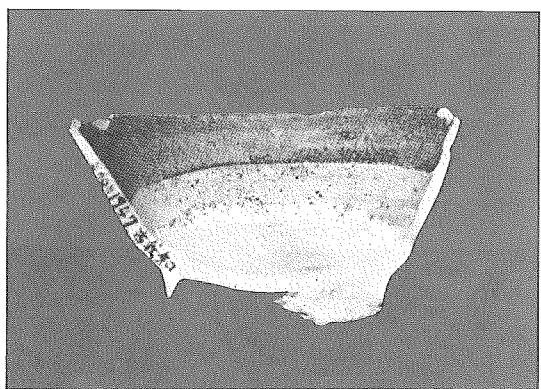
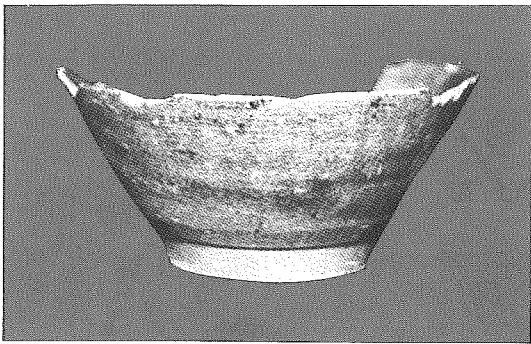


第IV図 湧田窯の窯道具

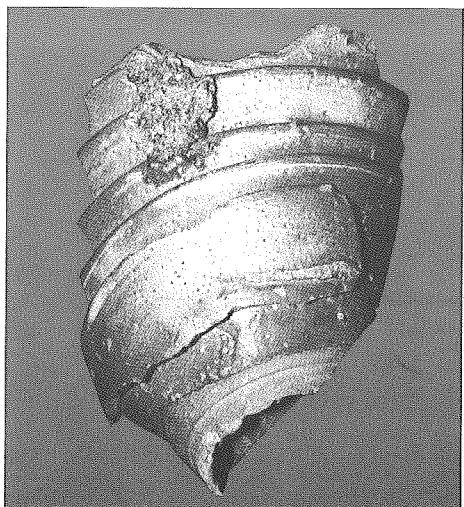
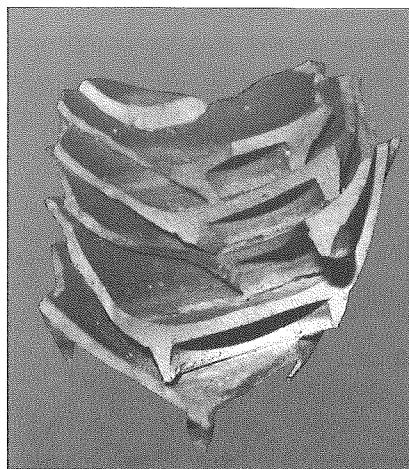
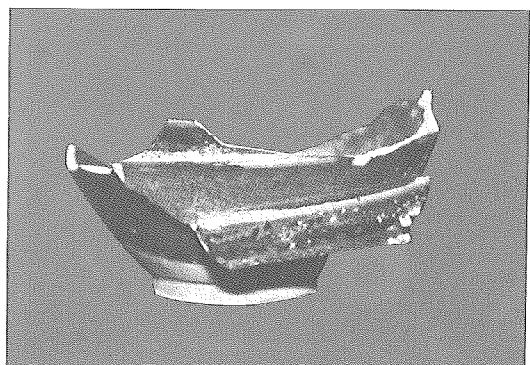
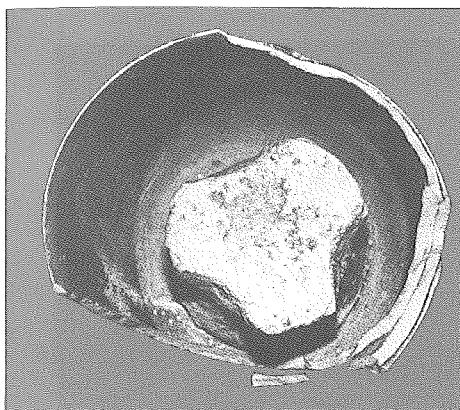
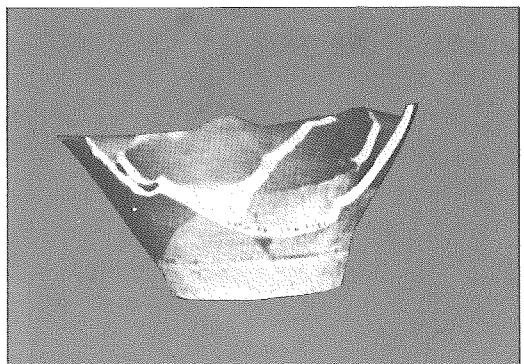
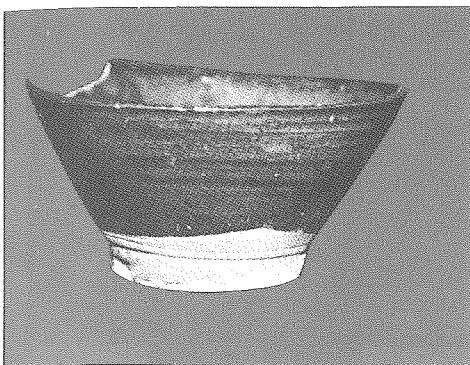


第V図 壺屋窯の製品

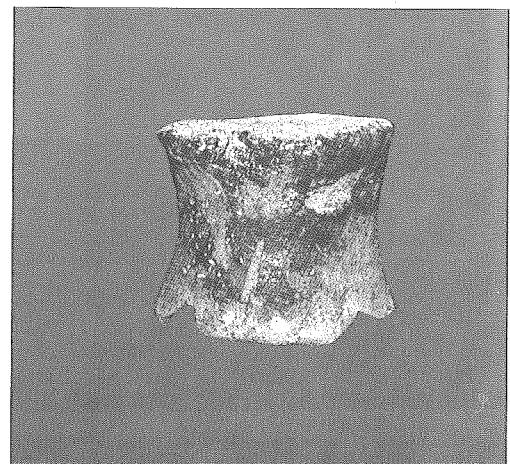
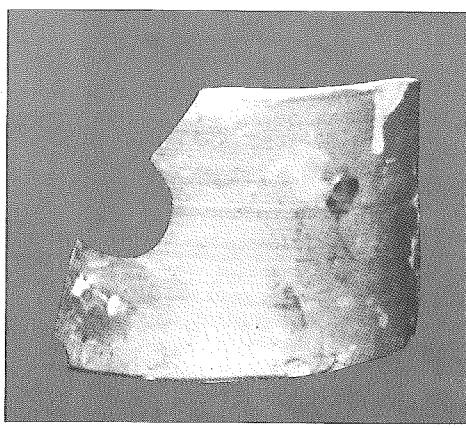
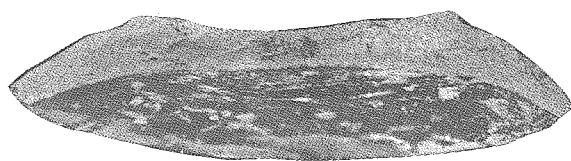
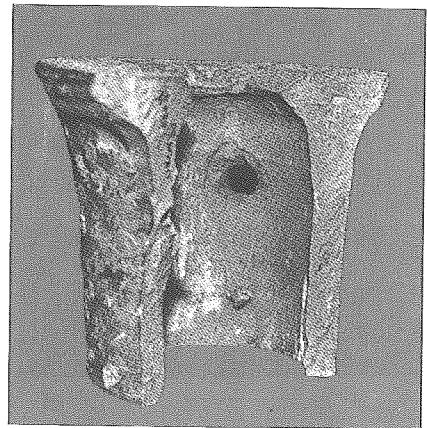
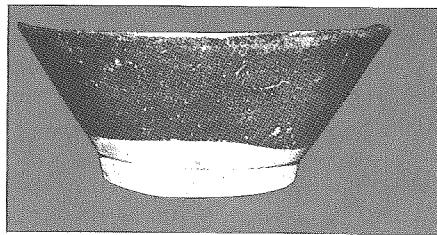
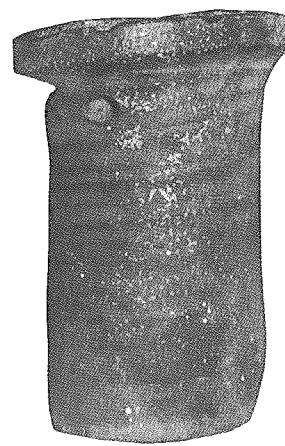
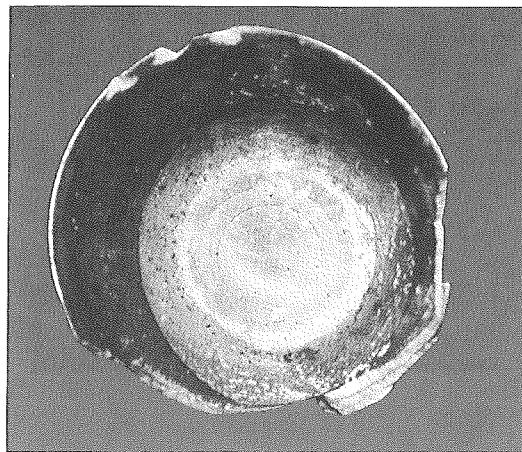
0 10 CM



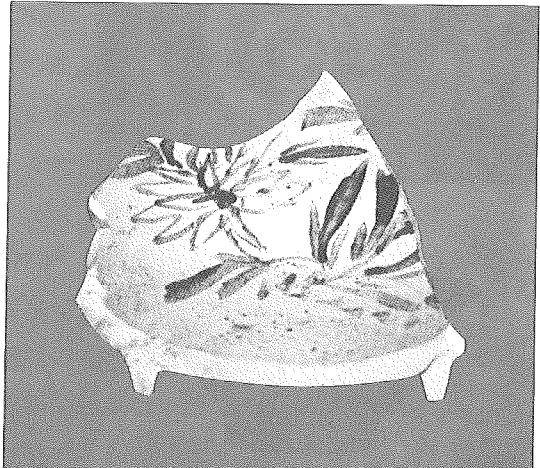
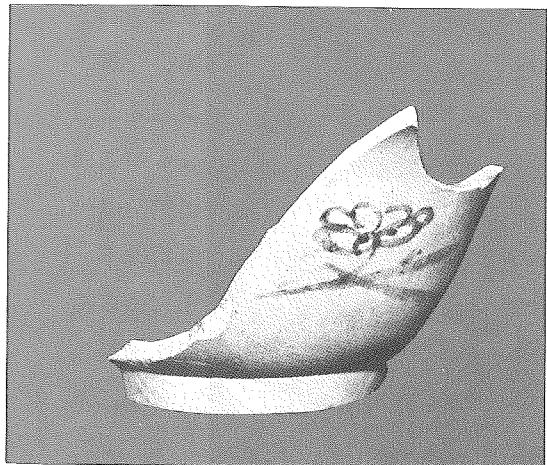
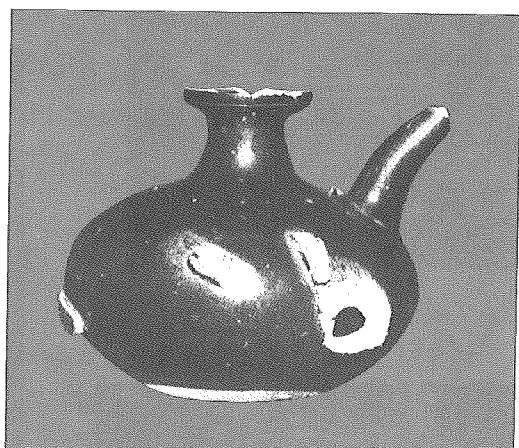
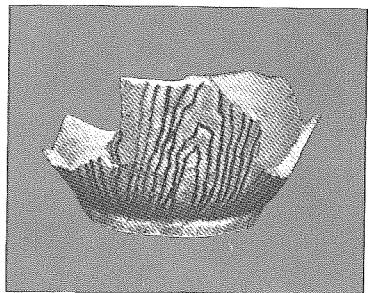
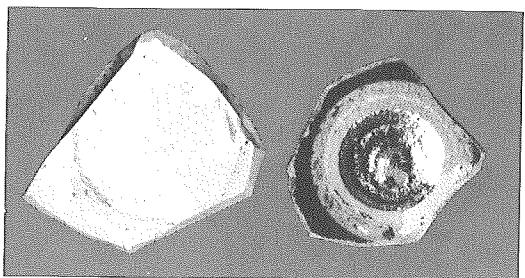
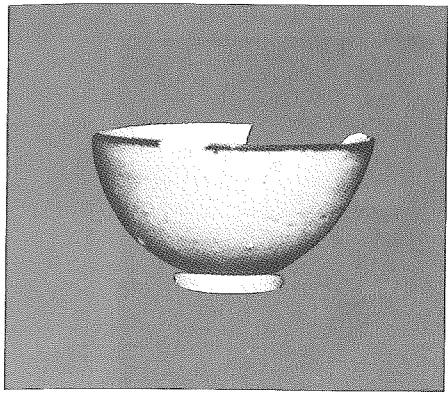
図版1 古我知窯の製品



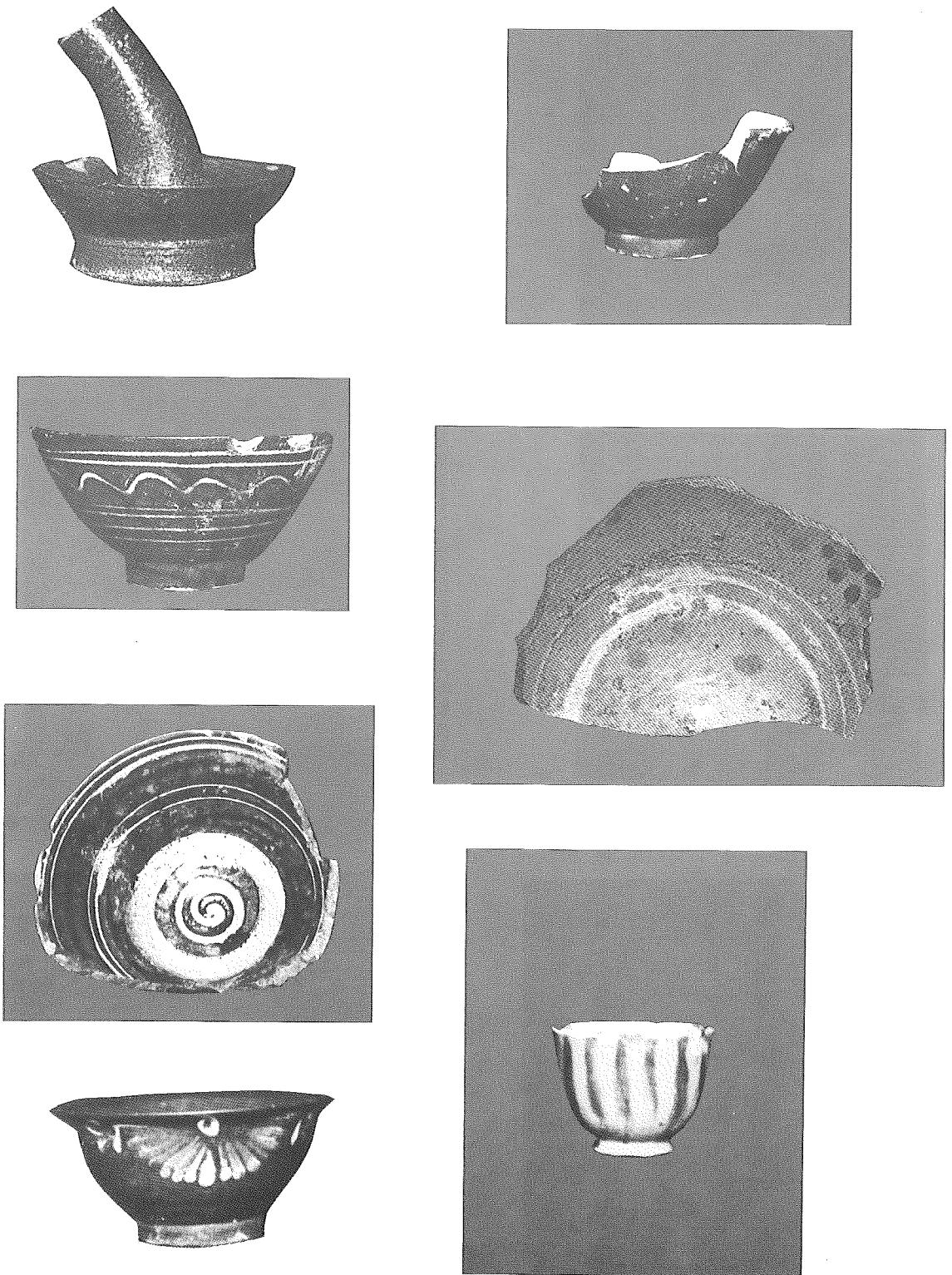
図版2 湧田窯の灰釉碗



図版3 湧田窯の灰釉碗と窯道具



図版4 湧田窯の製品



図版5 壺屋窯の製品